

豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

先日の土曜日、大阪・中之島のホールで会合があったので、昼前に車で会社を出た。中之島のどこかで昼食をとろうと思ったが、土曜日のせいか、ビジネス街の食堂はどこもあいていない。裏通りに入ったらあいているかもしれない。運転をしてくれている社員にそう言って、脇道に入ってもらった。しばらく探していると、喫茶店らしい店が見つかった。古ぼけた小さな店で、入ると薄暗く、カウンターの奥にばあさんが座っていた。見るとナプキンを折っている。お客はだれもない。私と社員がテーブルにつくと、ばあさんは水を持ってきた。

メニューを見て、「カレーライスを二つください」。言うと、ばあさんは「土曜日はお客が少ないので、カレーライスはつくっておまへんです」と言った。

「じゃあ、なにができるの」

「トーストだったらできますけど」

「じゃあ、トースト一つとホットコーヒーを二つください」

ばあさんは黙ってうなずくと、ケースから食パンを取り出して、ゆっくりと切りはじめた。見ていると、三センチくらいの厚さに切っている。二枚目を切ろうとするので、「おばあさん、一人前でいいから」そう言うと「はい、一人前です」

「そんなに分厚かったら、一枚で充分や。それを半分に切ってもらったらいい」そう言ったら、「はあ」と言って切りはじめた。手元がなんとなく危なっかしい。

そこへ、同じ年頃のばあさんが入ってきた。こないだ借りてたの、これでいいかな。言いながら千円札を出したが、店のばあさんは、いえいえ五百円でけっこう。そんな話をしている。

お金を払いにきたばあさんが帰ると、店のばあさんは、そうそう、というふにトーストにバターをぬって、皿にのせて持ってきた。振り向いた拍子に、トーストが一つ、床に落ちた。私は、やれやれと思った。

ばあさんは、床にちらっと目をやっただけで、はあ一つ、と一つ深いためいきをついた。せつないような、けだるいような、何とも言えないためいきだった。



それを見て、少しかわいそうな心持になった。私は「一つでいいから」と言って残った一つを食べた。コーヒーは冷めかかっていたが、案外うまかった。

「おばあさん、いくら」聞くと、「五百円です」と言う。

「それはおかしい。安すぎるよ」

「いえ、トーストはいいんです」

「いや、それはいかん。代金はきちんと払わしてもらおう。ふだんは幾らもらっているの」

「ほな、六百円もらいます」

それでも安いと思ったが、支払って外へ出た。

私は車の中で、ばあさんの境遇を思い浮かべた。時間つぶしにあの店をやっているのだろうか。それとも、生活の糧にして必死で働いているのだろうか。そんなことを思っていると、ばあさんのあのため息の顔がふーっと浮かんできた。するとなんだかいとしいような、妙な気持ちになってきた。またいつか、ひまがあったらのぞいてみようか、そんなことを考えていた。

(1996年・おばあさんのためいき)

会報誌 **New Wave** へご寄稿のお願い

「New Wave」誌は、皆さまに身近な会報誌としてご愛読していただくことを目指しています。その第一歩として、読者の皆さまからのご寄稿を数多く掲載することを計画しています。一人で心の中にしまっておくには勿体ないような面白い話や為になる話。それに、地元のグルメ情報などジャンルは問いません。

ご寄稿は、メール・アドレス「zennichi@jeda.or.jp」へ、件名「寄稿」と記入の上、送信して下さいますようお願い致します。800～1000文字程度にまとめた文章に写真2～3点を添えていただければ幸いです。

各単組の組合員企業ならびに賛助会員企業の皆さまよりのお便りをお待ちしております。
全日本電設資材卸業協同組合連合会・広報委員会